第2節　松倉城下の空間構造

京都大学教授
山村亜希

1　はじめに

松倉城は、天正7（1579）年に飛騨の戦国領主の三木自綱が築城した城郭である。三木氏は、飛騨南部の益田郡の萩原桜洞城を本拠としていたが、飛騨北部への進出拠点として松倉城を築き、居城とした。三木氏は、松倉城を「夏の城」、桜洞城を「冬の城」と称し、季節に応じて移動したとされる（『飛騨略記』・『飛騨群鑑』など）。三木氏は、天正 10 年の本能寺の変後の飛騨国中の混乱を制し、天正 11 年に飛騨を平定した。このとき、三木氏は高山盆地周辺では、鍋山城や三仏寺城、高堂城も、一族の城や隠居城として利用した。しかし、天正 13（1584）年に、羽柴秀吉の命で侵攻した金森長近・可重に攻められて、松倉城は落城した。飛騨国は金森長近に与えられ、金森氏は天正 15 年に高山城の築城を始める。

飛騨は、織豊勢力の侵入が他地域に比べて遅れたため、在地の国人領主による独自の進化を遂げた城館跡が多数みられる点に特徴がある[1)]。その一方で、松倉城の高石垣や桝形虎口は典型的な織豊系城郭の特徴を示しており、金森長近が高山築城に先駆けて改修した可能性が高いとされる[2)]。松倉城は在地勢力の三木氏によって築城された後、金森氏によって織豊系城郭として改修されたことが指摘されている。

松倉城の山腹・山麓には、屋敷や蔵と称される場所や平坦地群、寺社、市・町地名が少なからず点在している。これらは、松倉城に城下町に相当する空間があったことを想定させる。とはいえ、三木氏にとって松倉城は、築城時には恒常的な城下町を伴う城郭を意図したかもしれないが、結果的にその期間はわずか5年と短命に終わった。金森氏にとっても、高山城下町建設後は、至近距離の松倉城下町を維持する必要はなく、いずれにせよ城下町としての存続期間は短いことが推定される。このように、松倉城下町は戦国末期の抗争において、短期間経営された城下町であった。このように、複数の城郭が状況に応じて戦略的に併用されていた戦国末期の飛騨における拠点城郭に伴う城下町とは、どのような空間であったのだろうか。

ここで、高山盆地の北側の古川盆地における姉小路氏の城館群の総合調査（飛騨市教育委員会）の成果を参考にしたい。戦国期の姉小路諸氏の城館は、古代・中世寺院が立地する地域社会の拠点の近くに立地する傾向があった。16 世紀後期になると、古川盆地に進出し、姉小路氏の名跡を継いだ三木氏によって、古川城の周囲に武家屋敷、寺院、町を配置する城下町化がみられる。その後、金森氏の進出とともに、増島城が作られ、かつての古川城下から増島城下へと寺院や町が移されて、三筋町から成る計画的な町場を持つ城下町が建設された[3)]。これをふまえると、松倉城が三木氏と金森氏にとって、一時的にでも拠点城郭なのであれば、城郭の周囲に諸機能を集約させ、町場を創出する城下町が建設されたことも想定できる。

本節では、松倉城の周囲に「城下町」に相当する施設や機能が、どのような場所に、いかなる形態で存在したのかを、歴史地理学的視点から検討する。具体的には、地形図、国絵図、村絵図、地籍図といった地図資料を活用しつつ、松倉城の周囲の戦国期に遡る地理情報を地図上に統合する。松倉城周辺については、一次史料が皆無に近く、近世・近代の地誌や軍記、伝承が主な資料となる。個別には信ぴょう性に乏しい資料もあるが、地図資料や同時代の状況と組み合わせて解釈することで、戦国期の松倉城下町の景観復原を試みる。

2　地形と街道

最初に、地形と街道といった広範囲の環境の中で、松倉城の地理的立地を検討する。飛騨は、東に飛騨山脈、西に白山山系の 3000m級の急峻な山脈に囲まれた山国である。飛騨の河川は、大きくみれば、越中へ向かって日本海に注ぐ神通川（宮川・高原川）・庄川水系と、美濃を通って太平洋に注ぐ飛騨川水系に分かれる。それぞれの河川に合流する支流が、多数の深い谷筋を形成している。松倉城の立地する高山盆地は神通川（宮川）水系であるが、三木氏の旧来の拠点地域は飛騨川水系であり、2 つの地域は分水嶺を挟んでいる。一般的には、水系ごとに、気候・地形・文化・社会といった面で、地域のまとまりが形成される。そのことを考えると、三木氏の北部侵攻とは、性格の異なる地域の新たな支配を意味しており、桜洞城と松倉城を居城として併用したとされる点も、各地域に応じた拠点が必要であったためであろう。

松倉城は、飛騨の南北の分水嶺に近く、地理的には高山盆地の南に寄った立地である。松倉城の南の谷筋を伝って、最奥から尾根を越えると、三木氏と姻戚関係にある山下氏の山下城がある。松倉城は、山下城との連携も容易であり、三木氏の北部進出拠点としては好立地である（図1）。また松倉城は、高山盆地の南端にあるにもかかわらず、盆地周囲の山々よりも頭一つ抜けた標高約 850mからの眺望は、高山盆地を一望できるとともに、盆地に入る谷筋まで見通すことができて、良好である。

寛文十年巡見使国絵図[4]に記載された、寛永 10（1633）年の飛騨の街道は、基本的には、河川の作る谷筋を通り、源流近くまで進んでから、峠を越えて別の谷筋と結ぶパターンが多く、ルートは自然地形の谷筋の形状に規定されている。例えば、益田街道は、高山から宮川の谷を南下し、一之宮で宮川から逸れて分水嶺の峠を越えてから、久々野で飛騨川の最上流の谷に入り、飛騨川に沿って南下する。しかし、この法則はローカルにみれば該当しない箇所もあり、近世初期の街道が谷筋に沿って地形に適ったルートを通らず、尾根を途中で分断する短絡路となる区間もある。

その一つが、松倉城の北側を通る郡上街道である。この街道は、広いスケールでみれば、宮川水系の川上川と長良川水系の吉田川の相互の谷を結ぶ街道であり、谷筋の地形に適っているが、松倉城付近にクローズアップすると、松倉山の北に伸びる尾根を直線的に横断して、高山城に至る短絡路を形成している。このような尾根を横断する街道の短絡路は、人工的な道路整備を推定させる。高山城に向かう直線道であることから、金森氏の高山城建設以降の道路整備を推測させるものの、それ以前の道路整備である可能性も排することはできない。

松倉城周辺の街道整備は、三木氏段階でも行われていた可能性がある。松倉城は、鍋山城や三仏寺城といった三木氏が使用した主要城郭と同様に、高山盆地の外縁部に立地する。三木氏には、平野外縁部の城郭相互の連絡路が必要とされたことは、大いに想定しうる。『願生寺由来』によると、高堂城を手中におさめた三木自綱は、高堂城から松倉城に山通りに「直道」を作らせ、茶屋などを建てて、往来を容易にしたとする[5]。「直道」がどの道のことを指すのかは不明であるが、三木氏が侵攻先の高山盆地と古川盆地において、複数の主要城郭を利用し、相互の連携を図るために、道を整備した可能性は十分にあるだろう。その一つとして郡上街道の直線短絡路を新設した可能性を指摘しておきたい。また、第 42 図においては、松倉城から北東に向かい、国分寺前の東西道に合流し、後の高山城下町を通過して鍋山城に至る古道の痕跡を見出すことができる。松倉城から北に進む道を辿ると、国分寺・国分尼寺の直線道に合流し、さらに分岐して高堂城や古川城方面に向かう山道に向かう。近世の街道以外にもこのような複数の道が、戦国末期の主要城郭を結ぶ三木氏の連絡路として機能していたと推定される。なお、郡上方面に向かう戦国期の道筋として、国分寺と国分尼寺を経由する東西道は、古代以来の古道として存在したであろう。

次に、松倉山とその山麓一帯の地形を赤色立体地図から検討する。松倉城は、北は郡上街道、東は宮川・苔川の沖積平野、南は松倉谷（越後谷）に面し、西側は尾根が続く。西を除く三方の山麓はいずれも緩斜面となっている。よって地形的には、三方全てに城下町が展開しうる土地はある。ここで赤色立体地図か

ら、松倉山の尾根と谷に注目したい。山頂の松倉城から八つ手のように尾根筋が延びているが、東や北東の尾根筋は、武家屋敷跡が想定される吾神谷で切断される。この谷は南北に深く入り込み、南の越後谷まで到達している。また、普門院跡や千光寺跡がある谷（字大洞）も深く山に入り込み、南の字水ノ手西側の谷と谷頭が接近している。これらの2つの南北の谷筋よりも内側に、城郭遺構や遺跡地・伝承地は集中する。その外側には、松倉観音や字善応寺、字山王洞、字八幡洞といった寺社の伝承地が点在する。よって、この東西 2 つの谷筋が、松倉城の城域の地形的境界となっていたと考えられる。

3　地籍図からみた松倉城下町

松倉城の一帯は、近世には北側が上岡本村、東側が西之一色村、南側が千島村となり、複数の村落（大字）の領域にまたがっている。戦国期城下町の景観復原には、地割・地目・字名・字界などの詳細な土地状況が記載された近代の地籍図が有用である。松倉城の場合は、城下と推定される範囲の面積が広い上に、複数の大字に及んでおり、大字ごとに明治期の地籍図の残存状況が異なる。現在のところ、小字分布図（第7章第 41 図）の作成は行ったが、複数の大字を統合して、全域の地割・地目・字界まで明記したトレース図は未作成である。ここでは、時期は新しくなるが、全体の表記・年次が揃った地籍図である昭和 17（1942）年の『高山市土地宝典』における道・水路・小字名を、現在の都市計画図上に復原した。ただし、一部の小字については、明治期の地籍図も存在する。上岡本村には、明治 11（1878）年の改正地引絵図と、明治 25（1892）年の上岡本区の図面がある（飛騨高山まちの博物館所蔵）。このうち、前者は残存状況が悪く、内容の判読が難しいため、後者の明治 25 年 5 月の「灘村上岡村区　第六番　字古町・馬場・町屋敷・ゴアミ・大洞」を用いた。明治期地籍図が存在する小字に関しては、それらも参照しながら、城下の景観復原を試みる。

松倉城周辺の小字分布図からは、北側の上岡本村には、古町、町屋敷、馬場という字名がまとまって分布し、武家地や町が推定される。既に元禄の検地水帳には、「町屋敷」の地名がみえる。また、元禄9（1696）年の「上岡本村並春国御田地之絵図」[6]における町屋敷と馬場の地割形態は、昭和の地籍図と類似しており、字名と地割ともに、近世前期には遡るものであることがわかる。戦国末期の城下の痕跡を伝える字名であることは、十分に考えられる。

字馬場と字町屋敷は、対照的な地形にある（第 42 図）。馬場は、松倉山の支尾根から細長く舌状に伸びる台地上にある。一方で、町屋敷はその東側の谷に立地する。舌状台地の字馬場の中を一本の道路が貫通している。この道は、南に延伸すると、袈裟山千光寺の里坊であったとされる千光寺跡の立地する谷に向かう。一般的に山岳寺院は、本堂に向かう直線道の両側に複数の平坦地が展開する空間構成となる。千光寺跡の周囲にも、その坊院の一つであったとされる普門院跡を含めて、字大洞の谷を埋めるように、多くの平坦地が残る。馬場の直線的な道の原型は、山岳寺院である千光寺に至る参道であったのではないだろうか。とすれば、本来はこの道は峠を越えるものではなく、谷の最奥の千光寺本堂を終点とする道であったと推測される。郡上街道で分断されているものの、馬場の道の北側の終点には、墓地が占める小山の残丘がある。その付近の小字は塚屋であるが、飛騨の「塚屋」とは古墳の石室ないし穴居跡であるとの説がある[7]。現状の墓地としての利用を考えると、台地の突端は古墳であった可能性が高い。古代以来の古墳と山岳寺院を結んでいた古道が、馬場の直線的な道路ではないだろうか。

古町は、馬場の直線道と郡上街道の交差点北側に位置する小字である。『斐太後風土記』によると、天正7年に三木自綱が松倉城築城の際、商人をこの場所に集めて城下の市としたとされる[8]。松倉城の落城後、高山城下町成立後に、町屋は高山城下町に移動し、この場所は廃絶して古町の名だけが残ったという。松倉城下から高山への町屋の移動については、先の『願生寺由来』にも記載があり、高山の一番町・二番

町・三番町の三町は、「松倉石ヶ谷四十七軒を初て、七日町其他方々より七百餘軒」の屋敷を移転させてきたとされる。しかし、古町の字は、周囲の小字に比べて、極端に狭い面積で、地筆も小規模な 10 筆に過ぎない。古町は街道の北側のみの片側町で、地割も郡上街道に面した短冊形地割でもなく、この範囲に高山城下町に移転した常設店舗の町屋群があったとまでは想定しがたい。むしろ、郡上街道と馬場の直線道の交差点に、市場空間が設定されたことを示唆しているのではないだろうか。高山盆地や古川盆地には、七日町や八日町、三日町といった定期市を由来とする地名が多い。三木氏が松倉城築城に古町を建設したとする伝承をふまえると、このような市場ネットワークに、三木氏が松倉城下の新設市町を追加したことが推測される。

ここで、古町に近接する郡上街道について検討したい。先述のように、郡上街道は、台地の末端部を切通状に横断する人為的な道路である。馬場の台地の突端は、郡上街道によって切断され、その北側には小山の残丘がある。郡上街道が台地の張り出しを無視した直線ルートで施工されていることは、字ホナンの立地する台地をも切通状に横断して、小糸坂を形成していることからもわかる。明治・昭和の地籍図でも、街道に斜行し、その南北で連続する道や水路・地割が多く存在することも、地割形態のパターンが決まった後に、この街道が敷設されたことの傍証になろう。伝承によると、字森ヶ坪、森下、山洞、山越を通り、上岡本の石ケ谷で松倉道と分かれて松原へと進む旧街道があったと伝わる(『むかし噺西之一色』)。これらの地名を字名と対照させて、おおまかな位置を比定すると、松倉山の北側緩斜面の中腹を東西に通過する道と推定される。郡上街道は三木氏の段階で、人為的な街道ルートの付け替えによって、台地を横断する直線道に整備され、千光寺に向かう馬場の参道との交差点に、古町の交易空間が設定されたことが推測される。尾根の切通しは、交通を管理する関などを設置するには都合の良い地形である。

一方で、古町の南にも字町屋敷という町屋の存在を示唆する地区がある。町屋敷は谷地形に立地し、中央部と東端を水路が流下する。中央部の水路に沿って直線道が通り、その両側には間口が比較的整った短冊型地割が連なっている。地籍図の短冊形地割は、先述の元禄9年の「上岡本村並春国御田地之絵図」にも描写されているので、この地割形態が近世前期まで遡ることは確認できる。もちろん、これらの短冊形地割群が、直接的には棚田であることはいうまでもない。しかし、町屋敷という字名や、東側の短冊形地割の背割線が地形とは無関係に直線的であることをふまえると、『願生寺由来』が記す高山城下町に移転した町屋の存在を、ここに推測することも可能ではないだろうか。谷の中に短冊形地割群が埋め込まれたような形態であり、計画的な町屋敷の創出を想起させる。なお、町屋敷の地割の多くには、土留めの石積みが積まれている。近現代の石積みが多くを占めるが、中には前近代のものも混在しているようにみえるが、詳細は不明である。

字町屋敷の短冊形地割は、その形態に着目すると、2パターンがみられる。町屋敷中央の道と途中で交差する東西道よりも北側(中央水路の下流側)には、間口が狭い短冊形地割群がみられる。交差点から南側(中央水路の上流側)になると、一旦、地割が乱れ、更に城に近づくと、間口が広く、地割間の落差も大きい短冊形地割群となる。下流側の間口が狭い短冊形地割群は、字古町に近接する。古町が交易空間だとすると、それに関わる商人の屋敷地の可能性がある。それでは、城に近い上流側の間口の広い短冊形地割群は、どのような性格の町屋敷なのだろうか。

字町屋敷の中央水路は、字こがみ・コアミの吾神谷から流れ下る。吾神谷は、松倉城の大手道と推定される谷筋であり、奥には松倉城屋敷地の平坦地が存在する。谷の入口付近には、蔵屋敷や大屋敷と伝わる大型の平坦地もある。城主や一族・重臣の居住地が推定される。その外側には、昭和6年に五阿弥池が築造される前には、現存する土塁から西に石垣が延びて、谷を仕切っていたと伝わる。この土塁は、城下町と広義の城内を区切る装置であった可能性がある。

町屋敷中央の道が、松倉城の大手口に直接つながる道であることから、町屋敷も近世城下町の本町や大手町に相当する位置にあたる。ここで再び町屋敷の間口の広い短冊形地割群に戻りたい。先述のように、町屋敷の谷は吾神谷と呼ばれ、谷の奥の字名はこがみ・コアミで、溜池は五阿弥池である。『飛州志』は「五阿彌屋敷」が松倉山の麓にあるとしており、これらの地名が五阿弥の屋敷に由来することがわかる。阿弥号は、特に浄土宗や時宗教団の僧俗に多く付けられ、南北朝期以降は芸能や芸術に優れた一族にもよく付けられたことをふまえると、この谷にそのような職能民が居住していたことが推定される。城との位置関係からみて、城主と近い関係にあったとみるのが自然であろう。谷の奥だけでなく、山麓中腹の町屋敷にも、そのような職能民が含まれているとすれば、それは単なる商人町ではなく、城主と近い職人町としての性格が強いことになる。間口の広い短冊形地割群は、このような武家領主と近い職人町であったのかもしれない。

先述の『願生寺由来』によると、高山城下町の三町は、松倉石ヶ谷 47 軒を始めとして屋敷を移転させたとする。これを松倉と石ヶ谷の 47 軒と解釈するならば、馬場のさらに西側の郡上街道沿いないし山麓の石ヶ谷にも町屋敷があったことになる。石ヶ谷も町屋敷と同じ谷地形があり、同様の短冊形地割の棚田も広がる。石ヶ谷という地名からは、石材として有名な濃飛流紋岩の松倉石の露頭・崩落がある谷や、石工の集住地が想起される。以上のことから、松倉城下町には商人町と職人町から成る町人町があり、性格の異なる二つの町を分けて配置する計画的な町割の可能性が推定される。

古町・馬場・町屋敷は、松倉城の広い山麓の中で、特定の場所にコンパクトに集中する。この場所は、先述した松倉城の東西を画する深い 2 本の谷を、北側の山麓に延長したラインの間に収まる。山頂の城郭の範囲と連動している点からも、城下町の計画性が示唆される。

ここで同じ 2 本の谷を反対側の南側の山麓に延伸させると、字松倉洞の広い谷を画する。この松倉洞は、三木氏が南の山下城との連携を図るには格好の場所であり、吾神谷の大手口とは別の登城路や屋敷地があってもおかしくはない。『飛州志』の松倉城の図は、石垣で固められた城郭の 2 方向に「屋敷」、「屋敷跡」の平坦地を描く。このうち「屋敷」と注記された平坦地は吾神谷の屋敷地遺跡である。これとは反対方向に「屋敷跡」の平坦地を 2 か所描いている。赤色立体地図からは松倉城の南側の中腹には、平坦地の遺構は見出せないが、『飛州志』はおそらく松倉洞の方面の谷に屋敷地があった様子を描いている。また、城郭の三ノ丸の南側には出桝形虎口があり、松倉洞からの登城路はこの虎口に取りつく。松倉城の南側斜面の赤色立体地図を拡大すると、松倉城南側の直下で、松倉洞方面に続くつづら折れの道の痕跡を確認できる。昭和の地籍図には、松倉洞の奥に大型の方形地割を見出すことができる。大型地割付近は、現状では開発済みであるものの、山麓の赤色立体地図を詳細に検討すれば、登城路の続きの痕跡を見出すことが可能かもしれない。いずれにせよ、城郭を東西で仕切る2本の谷の内側に、城郭に関連する施設が凝集していると考えられる。

それでは、この松倉城の南北の城下町はどの段階で建設されたのだろうか。考古学的な調査結果が不足する現時点では、三木氏とも金森氏とも確証が得られない。先述のように、伝承や他の城との連携を考慮すれば、郡上街道の付け替えと古町の設置、松倉洞の大型施設は三木氏の建設ということになろう。また、町屋敷の短冊形地割は、郡上街道によって分断され、その北側の字ヒヤケ田にも街道と合致しない方位の短冊形地割が残ることを考慮すると、街道の付け替え以前、つまり三木氏の段階の早期に、町屋敷の短冊形地割の原型が形成されていたことになる。古川盆地の古川城でも、三木氏段階で城の山麓に武家屋敷地を集めるとともに、城から宮川を挟んだ対岸に「古町」を創出したと推定されており、三木氏が侵攻先の拠点城郭に積極的に町を創出したことは十分に考えうる。しかしながら、これは何を起点として考えるかによって、全く異なる結論となる。先述のように伝承を起点におけば、全て三木氏段階で建設されていたことになるが、一方で、郡上街道を金森氏の高山城下町建設時の街道整備とみるならば、金森氏段階の都

市計画と考えることもできる。今後の考古学的調査の課題となろう。

4 城下における寺社と旧集落

松倉城の北麓一帯には、町や屋敷が推定されるが、松倉城築城以前から存在した千光寺以外には、寺社の立地は確認できない。一方で、字名や由緒等から寺社が並んでいた景観を推定できるのは、松倉山の東側の山麓である。

松倉城の東側一帯は、高山盆地に接しており、近世の西之一色村であった。『飛州志』の松倉城は、東側の高山盆地から松倉城をみた景観を描くが、東側の山麓には西之一色村の集落と松泰寺が描かれている。その東側には「スノリ川」が流れ、高山盆地側からは、橋を渡って道が二方面に分岐し、一つは松泰寺に、もう一つは松倉山に向かっている様子が描かれる。この道は、位置からみて、先述の字森ヶ坪、森下、山洞、山越を通る旧街道であろう(『むかし噺西之一色』)。松泰寺は、金森重頼が寛永 6(1629)年に同地に東照宮を建立したときに、その麓に建てられた寺院である(『斐太後風土記』)。それ以前は、この付近は鴻巣森といわれ、清鏡寺という廃寺があり、その跡地に建立されたという。周囲の字名も、鴻之巣、森上、森下、森ヶ坪であり、松倉山の北東の支尾根の末端の鴻巣森に、清鏡寺の境内があったのだろう。その南側の谷は字山王洞であり、かつてここに山王社があったとする(『斐太後風土記』)。山王社は古くは鴻巣社と呼ばれ、清鏡寺の鎮守であったとする。このように、尾根末端の鴻巣森は、古来より土地に根差した宗教空間であったと推定される。苔川を渡って旧街道から分岐し松泰寺に向かう参道も、清鏡寺と山王社が立地していた中世の参道を踏襲したものであろう。さらに山王洞から尾根を隔てた南は、字八幡洞であり、谷奥には八幡宮が立地していたと推定される。これらの寺社を結ぶ山裾の道の近辺に、西之一色村の旧集落が立地していた。これらの寺社や集落は、松倉城築城以前から存在しており、三木氏や金森氏が新たに設定した訳ではない。もともと、この周辺が西之一色村の中心であったと考えられる。

旧来の寺社・集落地区の南には、戦国期には善応寺があったと推定される。寺伝によると、三木氏が松倉城築城時に堂宇を建て、如意輪観世音菩薩を守本尊とする真言宗善応寺を創建したとする。松倉城落城時に善応寺も焼失したが、金森氏は焼跡から本尊を高山城内に移し、さらに慶長 14(1609)年には金森長近の菩提寺として建立された素玄寺の境内に本尊を移した。善応寺は、地域の宗教空間に入り込むことはせず、そこから少し離れた、前面に宮川と苔川の沖積平野を見下ろすことができる、広々とした尾根を選んでいた。この立地は、松倉山の山裾を巡る道沿いにあり、山下城方面から高山盆地に入る入口にもあたる。このように、三木氏は地域社会の中心にあえて善応寺を立地せず、交通の管理が容易な場所に自らの寺院を配置したと考えられる。

三木氏が創建したとされる寺院は、善応寺の他に松倉観音堂がある。観音堂は松倉山から西に延びる尾根上に立地するが、そこに至る参道は、松倉山の山裾を巡る越後谷の道から分かれており、善応寺と同じく、山下城方面からの道を意識した立地であろうか。なお、善応寺と観音堂は、偶然かもしれないが、松倉城と東西にほぼ一直線で並ぶ。先述のように、松倉城の城域は城下町も含めて現実的には2つの深い谷で画された内側にあるが、広義の城域という点では、これらの寺院が境界であったのかもしれない。

西之一色村の中心地区と、先述の古町・町屋敷の地区は、尾根を隔てた別の場所であり、近世の村も異なる。地域社会の中心的な場の近くに松倉城を築城しつつも、そのような場所に町場や屋敷地を建設するのではなく、それとは抵触しない、別の方向に向いた空白の谷に、計画的な城下町を創出しているようにみえる。西之一色村の平野部は、苔川の沖積平野にあたる。苔川が谷口から盆地の平野に向かって解き放たれる西之一色村は、地籍図でみても、明瞭に蛇行流路や氾濫の痕跡がみえ、氾濫原を形成していたことが推定される。旧集落は、その氾濫を避けた段丘崖の上にあり、上流から取水した苔川の用水路が北

流している。そこから推測されるのは、沖積平野の水田開発を行う農村の姿である。松倉山の北側が狭い谷が入り組み、安定した水利が望めず、広々した平野に恵まれない山がちな地形であることとは対照的である。以上のことから、松倉城は、あえて地域の農村社会の中心は避けて、開発余地のある谷筋を中心に、城郭の範囲と連動させて、コンパクトに町と武家屋敷を整備した点に、特徴があると考える。その点では、まさに「城下町」空間が、松倉城の膝下に創出されたといえよう。

5 おわりに

本稿は、地図と地誌・伝承等を組み合わせた考察による城下町の景観復原の予察であり、大胆な仮説も多い。城郭のみならず、山腹や山麓の考古学的調査の成果も期待される。また、地籍図の形態分析も、明治期の地籍図を統合した地割レベルのトレース図が未作成な段階のものであり、地籍図の分析精度を一層上げることも可能である。今後の課題として、ひとまずは歴史地理学的視点からの松倉城下の空間構造に関する予察としたい。

1）佐伯哲也　「飛騨国における中世城館の概要」　2005　岐阜県教育委員会編・発行　『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 4（飛騨地区・補遺）』

2）中井均　「松倉城跡」　2005　岐阜県教育委員会編・発行　『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 4（飛騨地区・補遺）』、佐伯哲也　「松倉城」　2019　中井均・内堀信雄　『東海の名城を歩く　岐阜編』　吉川弘文館

3）飛騨市教育委員会編・発行　2022　『姉小路氏城館跡―総括報告書―』

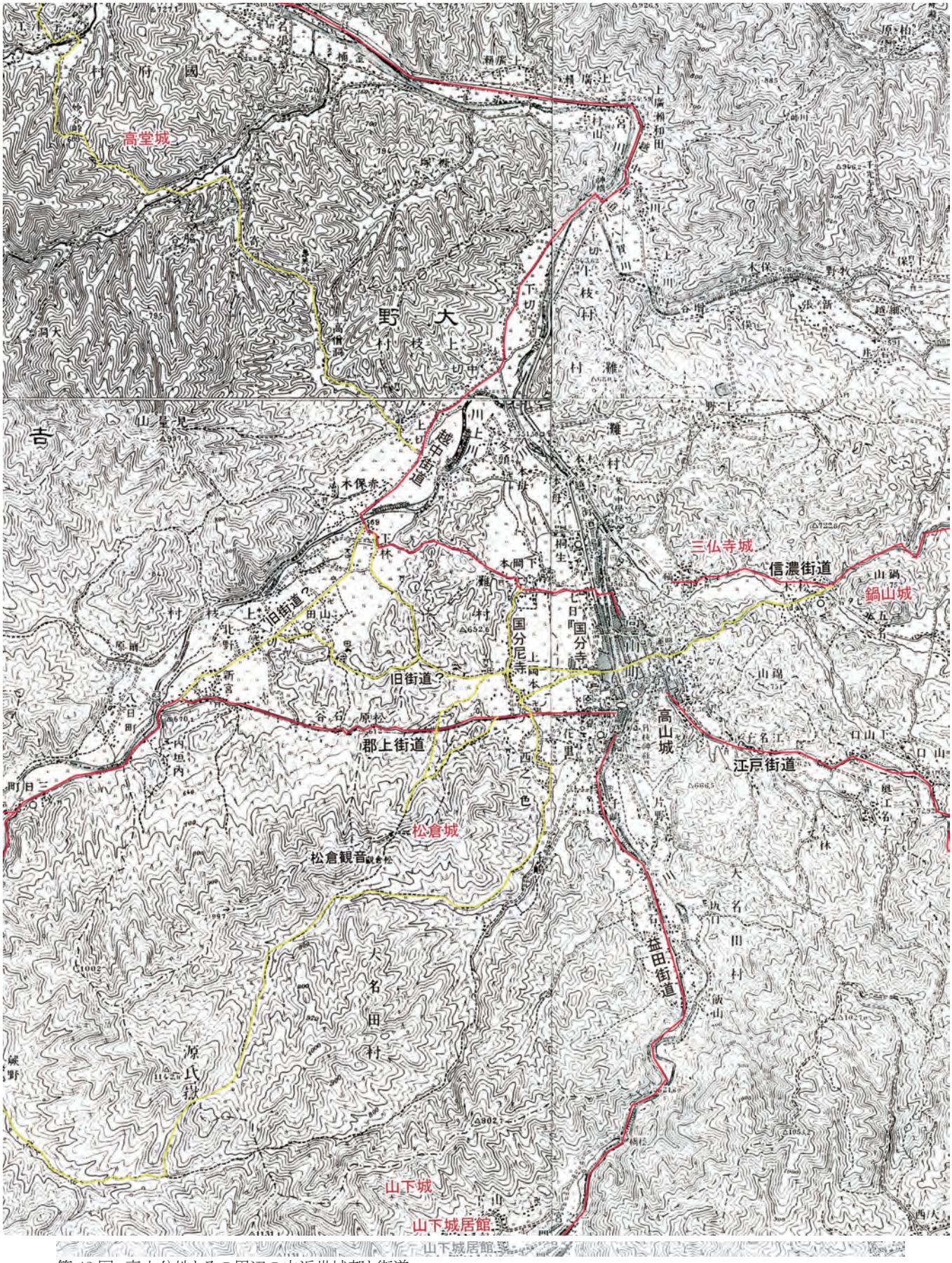
4）川村博忠編集『寛永十年巡見使国絵図　日本六十余州図』　2002　柏書房

5）「願生寺由来」は明和 3～4（1767～8）年に作成の寺伝である。「願生寺伝」として桐山力所編『飛騨遺乗合府（飛騨叢書３）』（住伊書院、1914）に所収。

6）高山市郷土館編　『高山の古地図―城下町高山の変遷―』　1992　高山市教育委員会

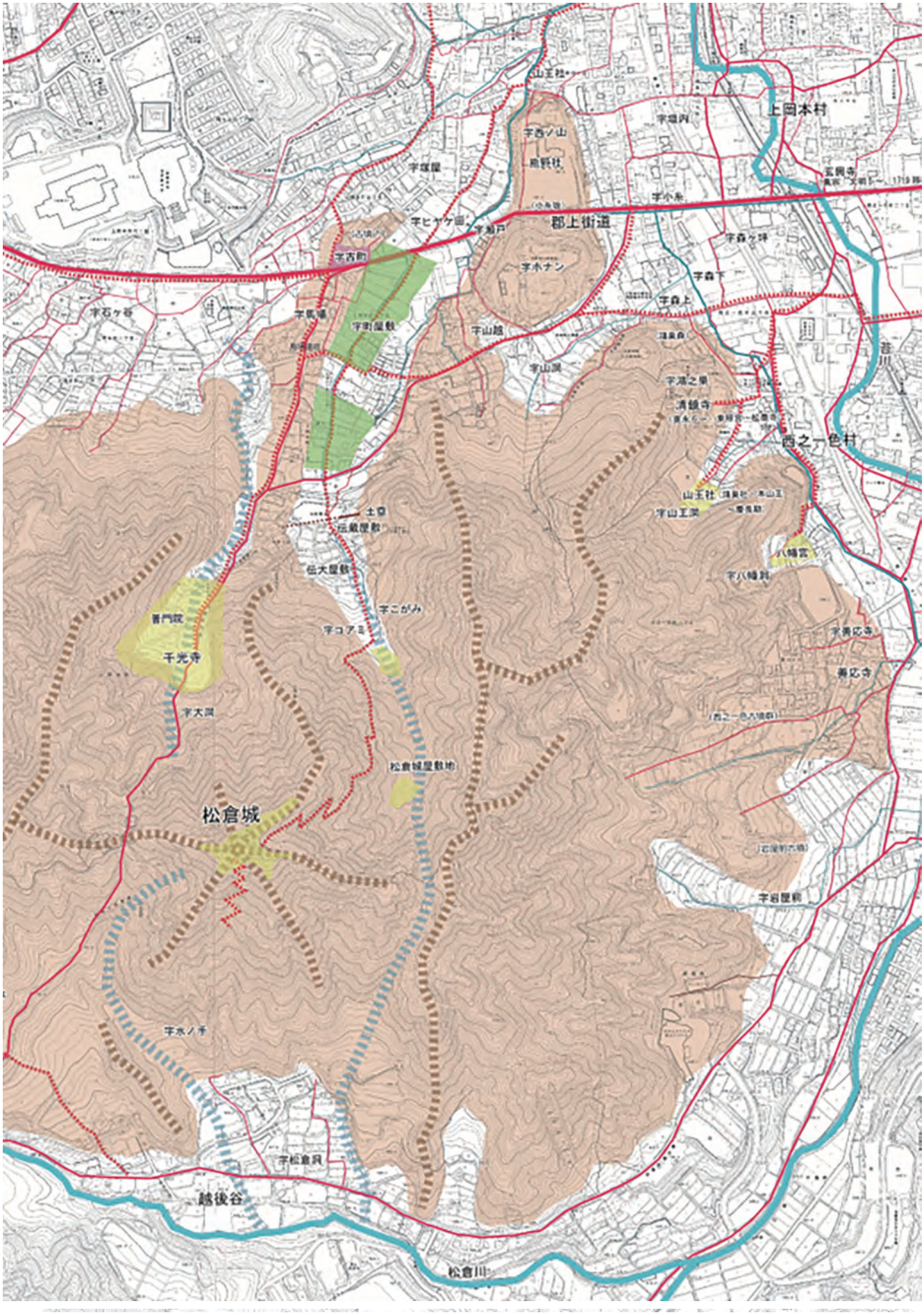
7）高山市教育委員会編『善応寺遺跡』　1984

8）「大野郡灘郷上岡本村」（刊本は、『斐太後風土記　2 巻』住伊書店、1915）。



第 42 図　高山盆地とその周辺の中近世城郭と街道

大正元(1912)年測量　1:50000 地形図



第 43 図　松倉城周辺の景観復原図